

□災害と出会い

—はじめてのボランティア経験—

(株)ケーブルネット鈴鹿社長 阿部好一

はじめに

人に歴史ありという。わたくしも今年で還暦である。現在の会社に出向し、東京から三重県鈴鹿市に赴任して4年になる。経営不振のケーブルテレビ局を立て直せといわれてやってきたのだが、なにせ経験したことのない未知の分野で、かつ、なじみのない土地であった。わたくしにとっては、まさに「予期せぬ出来事」であった。

しかし、テレビという事業に関わったせいか、もうひとつの「予期せぬ出来事」が待っていた。災害ボランティアという経験である。

今、ニタリと笑って「こんなわたしに誰がした」と自問自答することがある。犯人は、わたくしが赴任して半年後におこったあの阪神淡路大震災である。この大災害が、ある若い音楽家と、伊永勉氏(当時、日本災害救援ボランティアネットワーク理事長、現災害救援研究所長)との2つの出会いを用意したのだ。そこが水源に近い溪流だったとすれば、まるで急流を下るように出会いが出会いを呼び、今わたくしは豊かな大海の人となっている。

そこで出会った人たちは、己を熱くさせた、さしずめ共犯者の群像とでもいえるだろうか。災害救援というテーマを見据え、旺盛な実践力と信念をもって立ち向かうしたたかな人たちばかりだ。

わたくしは、彼等の言動の裏に、あの災害の残した爪痕の深さをいつも思い知らされてきた。それだけに出会いの陰影も深かった。彼等はわたくしの残された人生に、これから取り組むべき貴重な宿題を与えてくれた。とても感謝している。

わたくしと災害とのかかわり

わたくしは昭和37年に(株)フジクラに入社した。フジクラ本社は、東京の江東デルタ地帯にある。ここに本社工場ができたのが、大正12年8月。完成と同時に関東大震災で灰燼に帰し、再建されるといういわくつきの工場である。東京大空襲でも同じ運命をたどり、戦後の台風の襲来で何度か水害にも見舞われている。

重川先生(都市防災研)の夫君の父、故・旗野次郎氏が、関東大震災直後に設立したと

いう「市民防災研究所」が、実はフジクラの近隣にあることを最近知って驚いた。

切実で身近な感慨がひとしおであった。

わたくしは、フジクラでは生産管理、人事、製造、工場建設などにかかわってきた。

本社人事課長時代には、社員の海外派遣が多くなり、イランイラク戦争、イラクのクェート侵攻、マレーシアの飛行機不時着事故、アフリカナイジェリアでの盗賊による襲撃事件、マラリア感染などに遭遇し、かつてなかった海外での危機管理に追われたものである。災害や事故が、本人はもとより家族、周囲の人々にもたらすむごたらしさを、当事者の一人として経験したものだ。また安全管理責任者として、業界における工場の無災害新記録を達成した緊張と喜びも味わってきた。

工場の製造部長時代には、光ファイバーの開発から量産化にむけた工場生産に移行させる仕事をしたが、そのとき電電公社世田ヶ谷電話局の火災事故があった。72時間不眠不休で、工場からケーブルを出荷したこともあった。当時の真藤総裁から、すばやい対応に対し表彰をうけたことは、記憶に新しい。

ある若者 9 音楽家の訪問

1995年1月17日、あの大震災がおこった。

一人の若者(野田君)が、わたくしの社長室に現れた。要件は、一緒に災害救援のビッグイベントを開催しないかという提案だった。彼等3人の音楽家グループは、西宮出身で被災した仲間や家族のために、コンサー

トをやったが、大して金が集まらない。

そこで、メディアをあずかる社長のところへきたという。若者の真剣な訴えに、一応協力を約束した。

しかし、「待て」という気持ちが次第にのってきた。この災害をクールにみると、規模がケタ違いに大きい。復旧に長時間かかるだろう。救援も時間とともに風化していくのでは?息の長い支援策とは何だろうか?義援金の5万円が20万円になったとして、どれ程の意味があるのか?とつぎつぎに疑問が沸いてきた。

もうひとつの思いは、鈴鹿市に来てみて、ここは災害無防備都市だと感じたことだ。

「伊勢路にては、もの案じするな」とは、昔からこの地方でよくいわれてきた言葉である。避難所の場所をたずねても答えがかえってくる人はほとんどいなかった。

6,000人を超える死者の霊に答えるには、まず足元の防災からではないかという思いが日増しにのってきたのである。

当時、思いもよらない災害に対して、WhatcanIdo?は心ある人のすべての思いであった。誰しもが一つの共通の思いをもてない昨今、この機会を逃してはならないと痛感した。先の音楽家、野田君も交え、イベントよりも足元の防災に取り組もうと、知人の7~8人に呼びかけ、一緒に考えることにした。1ヶ月に7回も会合をもった。今思うと、この会合がわたくしのボランティア活動の始まりだった。

企業戦士であったわたくしには、鈴鹿という地域社会の構造、習俗などまるで解っていなかった。ボランティアといっても言葉だけの理解しかなかった。

足元の防災は何のために、誰が主人公で、どんな関係をむすぶのかなど、何も知らないことをむしろ武器として、徹底的に本質論を戦わしたものだ。今思うと、何のためにと問うたこのプロセスが、活動を長く持続させるエネルギーになったと思う。

結論は「防災ボランティアとネットワーク」を立ち上げようということになった。

心をひとつにしたネットワークをつくり、センター(基地)と連携した素早い動き(勝手連)がとれるもの。多種多様な人、情報、技術、知恵の集積をねらいにして、他の機関とも、従属するのではなく、自由な連携をとっていこうとした。

われわれの趣意書を新聞に発表し、3月18日、指定された場所に集まった38人で、ボランティア活動を開始した。このとき津や伊賀上野、松坂から来た人たちは、やがて自分の地域にボランティア活動を立ち上げ、やがてそれが一本化し、他県に先がけて「災害救援ネットワークみえ」が誕生することになったのである。今わたくしは、その代表幹事を務めている。

もうひとつの出会い

1997年正月早々、ナホトカ号重油災害が発生した。中日新聞に、西宮ボランティアの活動と伊永勉氏のことを一面で紹介された。阪神淡路大震災の経験を継承し、いち早くボランティアセンターを立ち上げたという記事であった。わたくしは「経験の継承」ということと、伊永勉という人物にとりわけ関心をそそられた。そんな時、三重県消防防

災課の初対面の平野主査が突然訪問してきた。この2月14日に開催する県主催の円卓会議「災害とボランティア」に出て欲しいという依頼だった。何と伊永勉氏がメンバーに入っているではないか。シンポジウムは、京大防災研の河田教授の司会、都市防災研の重川主任研究員と伊永氏、県の環境安全部の小坂次長、それにボランティア3名による円卓会議であった。この時、河田、重川両先生とも貴重な出会いをしたのである。

このシンポを終えて、年度末の多忙なスケジュールであったが、重油災害の現地取材を敢行した。災害ボランティアネットワーク鈴鹿の面々24名が小型バスを仕立てて朝5時に出発、その行動を追って、45分の特別番組「重油災害に学ぶ」を作った。

また、先の円卓会議と福井県三国町で開かれた「緊急報告、日本海重油災害の総括」を収録し、90分の特別番組「重油災害に学ぶ、二つのシンポジウムから」を製作した。ここで、時事通信の中川記者、自衛隊防衛研究所の小村氏そして、皇陵女子短大の沢野氏と顔を合わせるようになった。朝三時まで、中川記者から最近の地震学の動向について話を聞いたことは忘れられない思い出である。

被害想定図上訓練

この年の6月、三重県は町の単位にまでおとせる被害想定調査報告書を発表した。

これを地図上におとし、被害想定による図上訓練をしてみようということになった。

7月21日、商工会議所のホールは、100人

近い、しかも産官学民それぞれの分野の人達が集まってくれた。東京、静岡、大阪、神戸からもかけつけてくれた。

伊永さん、大阪市立大の宮野教授、三重県立看護大の黒田先生、小村さんも討論に参加してくれた。この模様を「災害図上訓練」という60分の番組にして放映した。このビデオが、後に小村氏、平野氏の「DiG」という手法のPRにお役に立っているようだ。

出会いの数々

三重県は現在とても元気である。北川知事の提唱する生活者主体の行政、それを可能にする理念と具体的手法、県職員の意識改革が進んでいるからだ。わたくしは21世紀の社会システムの実現可能な原形が、これにあるな、と実感している。職員研修も盛んで、市民にも公開されている。聴講生のひとりとして参加し、そこで京大防災研の林教授、大阪大の渥美助教授との出会いがあった。

渥美助教授は、災害ボランティアの活動は、ジャズの演奏の極意に近いと講演された。そこで先きの若い音楽家、野田君を交えてジャズとは何かと、彼の実演で語り合った楽しい思い出もある。

北川県政の申し子のような、当時消防防災課の平野主査は、われわれ三重の災害ボランティアの連携に大きな役割を果たしてくれた。彼は必殺の仕掛人であった。われわれもそれに応えたつもりでいる。さらに伊永氏が随所に顔を出し、われわれを支えてくれた。

防衛研究所の小村氏は、図上訓練の先生であり、お兄さん役であった。また時事通信の中川記者には、われわれ一同、災害にかかる執念と気迫を感じ、啓発されてきた。

一方、当時伊永氏を中心に、産官学民による「全国災害救援ネットワーク」構想が打ち出され、その準備会が、昨年11月大阪で開催され、現在も討議が進んでいる。

年の甲なのか、わたくしがその代表世話人におされてしまった。これも予期せぬ出来事であった。この準備会で、九州の普賢岳火山の災害で活躍された宮本氏や天理教災害救援ひのきしん隊の上村氏との出会いがあった。

また去年6月、福井地震50周年記念行事として、福井市で公開シンポジウム「経験から語る災害時のボランティアネットワーク」を実施したときは、広井東大教授にも呼びかけ人になってもらい、多忙のなかご出席いただいた。広井教授の研究室をお訪ねしたとき、蔵書の多彩さに大変興味をそそられたことが印象深かった。このシンポでは、被災地NGO協働センターの村井氏との出会いがあった。「災害救済の全国ネットワークは戦略である。全国の災害ボランティア活動は、いわば、戦術的な展開で、組織の一本化にこだわらず、各ボランティアの持味を活かし、日頃から顔の見えるゆるやかな関係と信頼を大切にしよう」と彼と話し合った。これは大きな収穫だった。

鈴鹿の仲間

わたくしの数々の出会いから得られた情

報や知恵は、そのまま鈴鹿や三重の仲間の共有財産でもあった。

鈴鹿の仲間は、毎月 17 日に我が社に集まる。CATV 局が集会所となり習慣化していることは、発災時には大きな利点である。

われわれ、鈴鹿の仲間は、わが町の防災マップづくりをはじめ、いろいろなイベントをやってきた。その都度自分達の成長を確かめ合ってきた。自由さと創造力の発揮、自己実現が活動の目的である。かたい絆に結ばれているわれわれにとって、防災にいかに関与するかは、地道な日常活動の結果であると思っている。本居宜長に「之を好み、之を信じ、之を楽しむ」という言葉がある、楽しくやろうがいつの間にか、われわれの合言葉になっている。

CATV とまちづくり

赴任当初のわが社の加入件数は、2,000 件だった。現在 12,000 件に近づき、加入率 27 パーセント、7 年目を迎えた今年は、何とか単年度黒字を達成しそうである。当初ほとんど外注だった番組制作を内作にした。編成と営業が一体となり自主制作に取り組んでいる。社長のわたくしも、月 2 本のシナリオを書き、出演する。徹底して地元密着を指向し、市民参加の番組も作っている。

わが社の代理店として、鈴鹿市には、60 店の電気商会があり、加入営業の一大戦力になっていただいている。この電器商店のカムリに「安全で安心なまちづくり」の看板をかかげ、防災ネットワークの構築に取りかかっている。進出急な大型店対策、商店街

活性化の一助になればという考えからである。CATV にかかわってまだ日が浅いが、自ら製作者となって市民のなかに入っていくと、ニーズの強さと多様さにあらためて驚く。紙面がなく、結論だけで言えば、その地域の活性化には、地域のメディアがどれ程、充実しているかが鍵といえる。

NHK のベテランディレクターで、大学教授に転身した津田正夫氏は、市民参加型のメディアづくりを提唱しておられる。先生の指導を得て、この路線を強化するのも、今のわたくしの願いである。

胸に残るキーワード

最後に、今までお会いしたみなさんから教えてもらったことから、わたくしの胸に刻み込まれたものを記して謝意を表したい。(敬称略)

ボランティアとは、ひとつの成熟であり、具体的実践である(甲斐、黒田)。自分が豊かであっても、となりに住んでいる人が豊かでなかったら、本当の幸せとはいえない。分かち合う精神こそが、それを可能にしてくれる(村井)。だが、ボランティアの地平は遠い。自分が好み、楽しくなければいけないか?(渥美)。災害にシナリオはない(渥美)。災害はひとを裸にし、真実の実力が問われる(重川)。そのために日常活動と情報の共有化、そして東南海地震という大災害への備えが課題だ(河田)。

孤立無援の最悪の想定が必要で、そのときは、困っている人がより困っている人を救うしかない。みんながボランティアなの

だ(林)。

次に備えるために、使命感をもったプロ級のコーディネーターと実践マニュアルが必要だ(伊永)。それを現実実践しているひのきしん隊(ひのきしん上村)と日常の訓練手法 DIG の提案(小村・平野)がある。

ボランティアの健康管理を忘れてはならない(沫田)。災害の爪跡と環境アセスメントに手落ちのないように(沢野)。災害にかかわるメディアの効用と限界をつきつめておくように(広井・千川)。

災害史のなかで演じられた人の営みを抽出し学びとる必要がある(北原)。すべての

ひとの存在にかかわる上位概念が災害だ。

これを執ように追いかければ、地球にやさしく、来たるべき新しい社会が、その地平に見えてくるのではないか(中川)。

以上は、わたくしなりの受けとめ方である。このように、数々の出会いから、わたくしが学んだことは、ライフラインとは、せんじつめれば、人と人とのコミュニケーションではないかということである。

人に歴史あり。私は今、これら出会いを自分史に刻み込み、これからも彼等と共に歩んでいきたいと念じている。

